

我がボランティア人生を振り返る

岩村 和彦（山のトイレを考える会 代表）

まずはじめにお断りしておきたいのは、この寄稿が果たして今回の資料集にふさわしいのかどうかを私自身が疑っていることです。これを除けばまさに本資料集がテーマや会の活動に合致した内容であることは誰にも異存はないところであり、寄稿者の皆さんへは当然として、これまでの資料集編纂に甚大なる労力を注ぎ込んできた当会の小枝副代表の熱意と情熱に深く敬意と感謝を申し上げる次第です。

さて山のトイレに関しての寄稿は知識、経験豊富な皆さんに任せるとして、ではお前は何を書けると問われた答えが表題となりました。読むに値しない内容を重々承知の上での寄稿をお許し下さい。

「ボランティア」を手元の三省堂国語辞典では「無料で社会奉仕する人、グループ、活動」となっています。次に「奉仕」を調べると「社会、君主、お客などのために尽くすこと」となっています。経済的に自己の利益を追求することなく、無償で社会に尽くす活動ということなのです。

言葉にすればちょっと大げさになりますが、現実的には多くの人が毎日それを実践しているでしょう。朝散歩がてらにゴミを拾っている人も立派なボランティアと言えますし、町内会活動なども無償という点でまさにボランティア精神なくしてはできません。誰でもどこでもその気持ちさえあれば、できることです。

いま人生を振り返ったときに、私なりに関わったボランティア活動に思いを馳せてみたいと思います。

初めてのボランティア活動と言えるのは、大学4年間に行った老人ホームでの清掃活動でした。北海道の田舎から東京の大学に入り、たまたま同じクラスだった北海道出身者と「超人会」というサークルを立ち上げました。白老町や斜里町など田舎町出身者ばかりなので「町人会」をもじって「超人会」と名付けたに過ぎませんが、さして芸のない我々にできることは、精々老人ホームの窓ふきなどの労力奉仕でした。

いきなり話は飛びます。2004年10月23日に起こった中越地震では翌11月19日～25日まで休みを取り、お手伝いに出かけました。現地に負荷をかけることは本意ではなく、テント、水、食料などを持ち、室蘭からフェリーで直江津に渡り、川口町までは代行バスで向かいました。ボランティア本部の近くにテントを張り、現地ではまる二日間だけでしたが、家々の片付けに全国から集まったボランティアと共に汗を流しました。山登りでの装備や経験が役立ったことは確かです。

現地は映像で見る以上の悲惨な状況でした。墓地の墓の9割が倒壊し、2階建てのスーパーは1階がなくなっていました。それぞれの建物には赤、黄、緑の紙が貼られ危険度を表していました。二日目に伺った田麦山地区の老人宅では家具を2階から降ろし、障子貼

りをしたのは子供の頃以来のことでした。倒れた仏壇も元の位置に戻し、仏さんも少しは落ち着いたことでしょう。

このときのことを詠んだ駄句がいくつかあるので恥を忍んで紹介します。「ベタ風のフェリー進みし佐渡沖の二日ばかりの微力を積みて」「頭たれし老婆差し出す甘柿にわが身の甘き暮らしを恥じて」「中越を去りて日常戻りつつ老婆柿の木がれきは巡る」「それぞれに汗流したる川口の若き瞳に教えられたり」。

2011年3月11日午後2時46分、皆さんは何をしていたでしょうか。私は旅の途中で紀伊半島の白浜温泉にいました。海岸にある露天風呂に入ろうとした瞬間に「風呂から上がって下さい」と係員が飛んできて、その直後東日本大震災を知ったのです。紀勢本線は不通になり、その夜は南紀白浜駅で多くの行楽客と共に一夜を過ごしました。翌日は九州新幹線全線開業の日で、苦勞して手に入れた新大阪駅始発さくらのプラチナチケットは無駄になりましたが、それはもうどうでもよいことでした。

会社に無理意をいい、翌4月6日から年休を取り東北に向かいました。この時もテント、食糧などのほか、持てる限りの救援物資もザックに入れました。岩手県一関駅裏にテントを張りベースキャンプとし、翌日から宮城県気仙沼市で要請のあった個人宅の瓦礫の片付けを行いました。滞在中3回HBCラジオで被災状況を報告しました。

中越地震の被害は建物の倒壊が主でしたが、それに津波が加わった気仙沼は地獄絵図そのものです。爆撃を受けた後の市街地のようでもありました。伺った個人宅では泥と石油、砂が入り混じった家財をほとんどが破棄するための作業になりました。この時も全国から集まった年齢も職業も様々な人と一緒になり、誰もが率先垂範して黙々と働く姿に、私自身胸を打たれたものです。

余談になりますが、最終日作業を終えて一関に戻り、銭湯の帰り焼き鳥屋に寄りました。そこで隣り合わせた地元客と飲む内に、彼は私に感謝して涙を流し、不覚にも彼の顔が滲んでみえました。彼は気仙沼市の出身だったのです。

さてここまでは災害での支援でしたが、山のトイレ活動に関わった経緯に少し触れます。社会人になってから山登りを始めた私ですが、途中から沢登りに傾倒し、ほとんど夏道登山はしなくなりました。それでもたまに沢登りの下山で夏道を使う時、休憩地点では登山者のトイレ紙が目立ち、非常に不快な思いをしたものです。

さて、これは何とかしなければと思っていたところ、2000年6月だったと思いますが、前代表の横須賀邦子さんの山のトイレに関する講演会があるのを知りました。講演会後も横須賀さんを交えて何人かで話し合いを持った席で「山のトイレを考える会」立ち上げが決まりました。この後の会の活動については当会のHPを見ていただくとして、会の活動を維持できている要因の一つにインターネットでの「北海道の山メーリングリスト（略称HYML）」の存在に触れなければなりません。

HYMLは1999年12月に立ちあがった北海道の山に関する情報交換を目的としたメーリングリストで、当初から活発にメールが飛び交いました。未組織登山者から山岳会会員、

プロガイド、初心者からベテランまで様々な会員で構成されています。組織ではないので会長や代表は存在せず、いるのは管理人だけ。当然会費もありません。

余りに活況を呈するので、私が幹事をかって出て2000年1月に第1回目の懇親会を行ったのです。これも余談ながら人生で幾多の懇親会を経験しましたが、この懇親会を越える面白さをいまだに知らないほどです。メール上でしか知らない想像と実物の落差に抱腹絶倒でした。驚くことにこの懇親会は翌2月、2011年3月を除いて毎月行われ、この3月で193回目を迎えます。顔の見えるメーリングリストの威力は絶大で、実態としては組織ではない山岳会とも言えるでしょうか。

山のトイレの活動にも当初から賛意を示し、これまで多くのHYML会員が協力してくれたことで、会の活動は維持されてきました。

またHYMLから生まれたものに「山の道を考える会（以降山道考）」があります。代表の大魔人（HYMLではすべてハンドルネームで呼び合う）、事務局長が gan こと私、会計かすみ草さんの3名が不動の会員で、他は都度HYMLからの会員が加わります。そもそもは2000年に或る会員からのメール投稿がきっかけでした。空沼岳～札幌岳の登山道が笹で覆われ大変だという内容です。そこで直ぐに笹刈を呼びかけて、二日間延べ80人ほどで縦走路の整備を行いました。他にも余市岳、イチャンコッペ山、無意根山などの登山道の整備を16回ほど行っています。参加費を払い、労力を提供するのですから、ボランティア精神なくしてできません。

また山道考では養護施設の子供を連れての空沼岳登山と万計山荘での宿泊も数回行ってきました。ほとんどの子供が初めての登山と山小屋体験を喜んでくれました。

HYMLには山のスペシャリストも多々いるので、「冬山講習会」「スキー教室」「初心者沢登り教室」「救命講習会」「ロッククライミング」なども随時実施し、未組織登山者のための安全性や技術力向上を行っている点も見逃せません。多くの会員が誘い合い、切磋琢磨して入山していることで、ある意味未組織登山者の受け皿になっていると言ってもいいでしょう。

HYMLに入るまでは藻岩山しか知らなかった初心者が、冬山を知り、沢を遡行して日高の頂に立ち、下りの滝では懸垂下降して下山する。こんな会員が一人二人ではないことで、HYMLの果たしてきた役割と位置づけがお分かりになるでしょう。

さらに特筆すべきは北海道新聞社から「北海道雪山ガイド」「北海道スノーハイキング」の専門書も2冊出版していることです。私も筆者の末席ですが、取材から編集まですべて会員が手弁当で行いました。過去この分野の本は少なく、冬山への入山者が一気に増えました。その裏付けに何度も増刷になるほどの人気で、その巨額な印税をすべて自然保護団体や震災先への寄付に充てています。社会活動としての貢献度は極めて高いものと言えます。当会も貴重な活動費として寄付を頂いてきました。

まさにこれは余談ですが、私の過去出している沢登りの紀行本やガイド本4冊もすべてHYMLのメンバーと同行した記録を元にして生まれています。我田引水を許してもらえ

れば、沢本の出版で少しは沢登り人口を広げられたかな、との自負はあります。また 2008 年に北海道新聞、2011 年朝日新聞、そして昨年 7 月から再び北海道新聞でコラムを担当させていただいていますが、取り上げている話題のかなりがHYMLの活動からのものですから、活動の分野の多岐が分かるでしょう。

タラレバを承知で言えば、その意味ではHYMLが無かったら大袈裟ですが私の人生も随分と違ったものになっていただろうことは想像に難くありません。

本論に戻ります。HYMLの活動がこれほど続き、多くの人に多大な影響を与えた要因を探る時、懇親会の果たした役割は絶大なものと言えるでしょう。月に一回居酒屋に集まり、18 時半から 22 時半まで続きます。下戸も上戸も一律割り勘。単なる飲み会と言えばそうですが、全員が自己紹介を兼ねて近況報告することで、初参加者も直ぐに場に馴染めるのです。インターネットというパソコン上だけのつながりではなく、実際に顔を合わせ、酒を飲み、話し合い、人物への信頼性、親和性がその後の行動につながって行きます。人を知ることで、メール上での文面に書き切れない意図も理解しやすく、余計な摩擦や炎上防止にも役立っています。

また組織ではない点で、指揮命令で参加するのではなく、あくまで誰かが立てた計画に個人の意志 100%での参加ゆえに、参加者は率先垂範して事に当たるのというメリットは計り知れません。

さて、ここまで経験してきた、或は進行中のボランティアに関することを述べてきました。ボランティアをする上で私が留意していることがいくつかあります。「できることは人それぞれ違う」「できることをできる人が」「無理すると長続きはしないから自分のペースで」「ボランティアを楽しもう、悲壮感を持たない」「自分のことは自分で始末、現地に負荷はかけない」「多少の行き違いは許容範囲と考える」「自己満足？いいじゃないか、それで少しでも良くなるならば」「情けは人のためならず」など。

これらを皆さんに強いる積りも、同調を頂きたいとも思いません。何より大事なのは、まずそれぞれが社会に対してどう向き合うかであって、その意志こそ尊重されるべきだと思うからです。

私には既に成人になった 3 人の子供いますが、最低限のしつけを除き、自分の価値観の押しつけだけはしないようにしてきました。私の行いを子供自身がどう背後で見ているかを尋ねたこともありません。ただし私のやっていることへのきっかけだけは作ってきました。それ以降するもしないもまさに本人の判断です。まして赤の他人にはなおさらのことです。

さて最後におまけを。高校生の時室蘭の献血センターでした初めての献血が先月で 4 9 1 回となりました。それがどうした？と問われればその通り。他人のためではありません。毎週末の沢登りと毎朝のジョギングのため健康状態の把握が主目的で、二義的に世間のお役に立てれば、との程度に過ぎません。これが五木寛之著「青春の門」の時代なら多分売血で生計を立てていたかも。拙文にお付き合い感謝です。 (完)